別　紙　2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　藤田雄二

論文題目　日本、朝鮮、中国の近代にみるゼロト主義の論理
—攘夷論と守旧論に関する比較研究—

１９世紀、西洋諸国の開国要求に直面して、東アジアの国々は様々な対応をみせた。本論文は日本、朝鮮、中国の反応パターンについて、「ゼロト主義」と「ヘロデ主義」という用語を使って説明している。

「ゼロト主義」は、攘夷論（自国に及んできた外国の勢力を排除しようとする主張）と守旧論（自国の伝統を守るべきで、外国流に変えるべきではないという主張）の総称として使われており、「ヘロデ主義」は和親論と開化論の総称として使われている。ゼロトとはユダヤ教の一派であったが、他宗派とは違い、暴力によって、エホバの選民を苦しめエホバを冒瀆するものの撲滅を期して戦い、惨敗を喫している。一方、ヘロデという用語はローマの支配機構の一員として統治を行いながら、ユダヤ人社会の発展に尽くしたヘロデ大王に由来する。Ａ．Ｊ．トインビーは『歴史の研究』の中で、２つの文明が接触した時に優勢な側の文明に対して劣勢な文明が示すパターンの中で、彼我の優劣を顧みず、自らの文明を固守しようとしたものをゼロト主義と名付け、それとは逆に、優勢な文明を進んで受け入れることによって生き残りを図ろうとしたものをヘロデ主義と名付けた。

本論文は、こうしたトインビーによって使われた用語を手掛かりとしながら、日本、朝鮮、中国の近代において、ゼロト主義に相当する主張を掲げた運動を一括して取り上げ、考察の対象としている。考察の主たるポイントは、運動の当事者であるゼロト主義者の主張が、ヘロデ主義者の主張によって覆されないだけの堅固さを持っていたかどうか、に置かれている。併せて、本論文では、ゼロト主義に関する３国の比較、すなわち、ゼロト主義を通してみた３国の対外態度の比較も試みられている。

本論文は序論、第１部（１—２章）、第２部（３--５章及び付論）、第３部（６—７章）、結論より成っている。末尾に注と文献目録が付され、全体のページ数は314 ページで

ある。本論部分は、400 字詰め原稿用紙に換算して、約800 枚に相当する。

序論では、本論文の基本的な視点が示されている。先行研究はゼロト主義を「盲目的」とか、「情緒的」といったイメージで捉えており、その根底には、ヘロデ主義的対応は合理的で、ゼロト主義的対応は非合理的だ、との理解があると指摘している。

その上で、著者は、ゼロト主義者がヘロデ主義的対応に反対した根本的な理由を、ヘロデ主義的な合理性のもつ盲点に求めると記し、どこに盲点があるかというと、ヘロデ主義の主張が持つ論理構造にある、と指摘している。続けてこうした主張はヘロデ主義的対応は合理的で、ゼロト主義的対応は非合理的だという理解を含め、ゼロト主義とヘロデ主義に関するこれまでの通念を覆すものだ、と指摘している。

なお、とりあげる時期に関しては、国によって違いがあり、日本に関してはペリー来航の前夜から倒幕論が主流となるまで、朝鮮に関しては対日修好の前夜から日韓併合の頃まで、中国に関してはアヘン戦争の前夜から義和団事変の頃まで、であることが指摘されている。

「第１部　裏返しの現実主義」の「第１章　一般的考察（その１）」では、ヘロデ主義の主張の論理とゼロト主義の主張の論理は鏡像的関係にあることが指摘されている。すなわち、ヘロデ主義の主張の柱は（１）ゼロト主義的対応によって国を保つのは不可能であり、したがってヘロデ主義的対応をとることが必要である、（２）ヘロデ主義的対応によって国を保つのは可能であり、したがってゼロト主義的対応をとるのは不必要である、という命題である。対するゼロト主義の主張の柱は、これを鏡の像のごとく裏返した形となるのであり、（３）ヘロデ主義的対応によって国を保つのは不可能であり、したがってゼロト主義的対応をとることが必要である、（４）ゼロト主義的対応によって国を保つのは可能であり、したがってヘロデ主義的対応をとるのは不必要である、という命題である。

本章では、ゼロト主義の主張に関して、ヘロデ主義的対応によって国を保つのが不可能だという点こそが基本的な主張で、ゼロト主義的対応によって国を保つことが可能だという主張は、この基本的な主張を前提にした添え物にすぎないことを指摘している。さらにこのヘロデ主義的対応によって国を保つのが不可能だという主張は、自国の政府や臣民に対する不信に基づいていることが指摘されている。こうした不信は当時の現実を反映しており、否定するのはむつかしい。しかも、不信を根拠にした、ヘロデ主義的対応によって国を保つのが不可能だとする主張は、彼我の優劣に関係なく成立する。従って、ヘロデ主義者が西洋文明の優越性を強調しても、それだけではゼロト主義の主張を覆すことはでき

ない、と指摘している。

このように第１章で、ヘロデ主義の主張によって覆せない論理が如何にして成立しうるかを論じた上で、「第２章　事例研究（１）：日本の場合」で、日本の幕末の攘夷運動を取り上げ、日本の攘夷論者の主張が何を拠り所にしていたのか、考察する。まず、徳川斉昭、大橋訥菴、吉田松陰という３人の代表的人物を取り上げ、彼らの思想を考察する。その上で、日本の尊王攘夷運動においては、戦争を避ければ、人々は安心して自助のための努力をしなくなる、という論点が強かったことが明らかにされる。言い換えれば、自強のためにこそ攘夷が必要なのだ、という論理である。

本章では、幕末の攘夷論者が西洋の強国と戦って勝てると思っていたのかどうか、そもそも勝つことを求めていたのかどうか、という問題が検討されている。彼らはまともに戦って勝ち目がないことは認識していた。しかし、「廟堂の議論さへ一決」すれば、堕落した武士たちも面目を一新するだろう、と考えた。さらに攘夷を通じて軍備を整えることができる。本章では、戦争には負けても、軍備が整えられれば、少なくともその見通しが立てば、攘夷論者の目的は一応達成されたことになる、と指摘している。戦争となれば、勝つことが優先され、形骸化した制度や既得権益は顧みられなくなり、また、敗戦の代償が致命的でなければ、その成果は戦後に活かされていくであろう、と彼らは考えた。まさしく「裏返しの現実主義」である。

次に「第２部　自強に代わる道」では、日本、朝鮮、中国の３国の比較を中心に考察しており、「第３章　一般的考察（その２）」では、朝鮮と中国のゼロト主義と、日本のゼロト主義はひとつの点において顕著に異なっている、と指摘している。それは、自強に対する姿勢である。日本の攘夷論者にとっては、攘夷は自強を実現するための手段といっても差し支えなかったが、こうした自強のためなら何でもするという姿勢が朝鮮と中国のゼロト主義者には欠如していた、というのである。

「第４章　事例研究（２）：朝鮮の場合」は、朝鮮のゼロト主義の代表として攘夷と守旧の両主張を共に持つ衛正斥邪派を取り上げている。衛正斥邪とは、正学を守り、邪学を斥けるという思想である。検討されているのは、崔益鉉、柳麟錫ら在野の朱子学者の主張である。本章では彼らの主張を前期（１８６０年代から壬午軍乱に至る時期）、中期（１８９５年から光武改革に至る時期）、後期（１９０４年から１９１０年の日韓併合に至る時期）に分けて論じている。時期によって彼らの主張の重点は異なっている。前期は攘夷を中心に主張しているが、中期には守旧と反日が中心となり、西洋諸国に対する攘夷は主

張されなくなる。後期には反日が中心で、守旧の主張も控えめになる。

本章は、彼らの主張が時代とともに「開明」的になってきていることは認めつつも、抵抗の根強さに注目している。彼らに根強い抵抗を続けさせた要因として、本章では、儒教こそ自国の生命線という信念の存在を挙げている。では、何故、彼らは儒教を守ることに国を保つことにもまさるほどの関心をもったのか。この点に関しては、自国は堕落していない、世界で唯一の国だという考え方があったことが指摘されている。

本章では、衛正斥邪派以外の朝鮮のゼロト主義の担い手として、東学信徒にも言及している。衛正斥邪派が、儒教の道徳的な力によって「倭洋」（日本と西洋）の軍事力に対抗しようとしたのに対し、彼らは東学という宗教の信仰によって得られる、超自然的な力でもってそれに対抗しようとした。軍事的な劣勢を非軍事的な力で補うという発想は、衛正斥邪派と共通している、と指摘している。

続いて「第４章　事例研究（３）：中国の場合」では、中国のゼロト主義について３つに識別して論じている。第１は主戦論、第２は洋務・変法運動に対する反対論、第３が仇教運動である。中国では、ゼロト主義の担い手は朝鮮とは違って、頻繁に入れ替わることが指摘されている。

主戦論と洋務・変法運動に対する反対論の担い手の組み合わせは、次の３つのタイプに分けられる。

（ａ）徐致祥型：主戦論者であると同時に、洋務・変法運動に反対。

（ｂ）張之洞型：主戦論者であるが、洋務・変法運動に反対ではない。

（ｃ）王闓運型：主戦論者ではないが、洋務・変法運動には反対。

仇教運動については、その中心的な担い手は、地方の郷紳や一般民衆であり、「民」主体であるが、主戦論、洋務・変法運動に対する反対論は「官」主体である、と指摘している。

このように、中国のゼロト主義は複雑で多岐にわたるが、本章ではそれぞれの種類ごとに、諸論点や諸傾向について概括的に説明を加えている。

特に守旧的主戦論者は武器は劣っていても、持久戦に持ち込めば勝てる、正規軍が役に立たなければ、民衆の力を用いればよい、と考えた。排外的民衆の力を自強に代わる拠り所にしようとしたのである。

このように朝鮮と中国では、自強を放棄するにあたって支えとした拠り所が異なるが、これについては、両者の自己イメージの違いと関係づけて説明しようとしている。すなわ

ち、朝鮮では自国は小国というイメージが定着していたのに対し、中国では、自国は大国で、広大な領土と人口をもってすれは、特別に自強を追求しなくても、西洋に対抗できると考えていた、というのである。

第2部の付論では、当時の日本人が抱いていた自己イメージについて論じている。日本人は不明確な自己イメージしか持ちえなかったと指摘し、その理由としては、地理的特性のため、さらには鎖国政策ににによって外界との交通が制限されていたために自国の規模が感得されにくかったことを挙げている。日本のゼロト主義者が自強に積極的であったのは朝鮮のように諦観も、中国のように余裕も持ちえなかったために、ひたすら自強を追求する以外に道を見つけ出すことができなかった、という説明も可能だ、と指摘している。

最後の「第3部　転向の条件」は、ゼロト主義からヘロデ主義への転向について論じた2章から成っており、「第6章　一般的考察（その3）」は、ゼロト主義からヘロデ主義への転向について考察している。こうした転向については従来、西洋文明についての認識が学習を通じて深まった結果として説明されてきたが、ゼロト主義の主張の論理は西洋認識の深まりによって覆るようなものではない、と指摘している。

ただ、朝鮮と中国では、ゼロト主義からヘロデ主義へと転向した例はあまりなく、問題は日本で、攘夷論者が和親論へと転向した例は珍しくない。第1章での考察から明らかなように、ゼロト主義者が転向するための条件は、ヘロデ主義的対応によって国を保つことが可能だという確かな見込み、とりわけ抜本的な内政改革が行われる確かな見込みが得られることである。ヘロデ主義的対応に対して期待が持てるようになれば、困難をおしてまでゼロト主義的対応に賭ける必要がなくなるからである。こうした転向についての仮説を立て、「第7章　転向に関する諸事例」において、検証している。具体例として取り上げているのが、松平慶永と中岡慎太郎である。松平の場合は、雄藩連合政権の構想が、中岡の場合は、内戦によって国内政治の活性化が可能という発見と、台頭してきた薩長勢力への期待が攘夷論の清算を可能にしたことを裏付けている。

「結論」はこれまでの論点を整理して、総括をしている。ここでは、ヘロデ主義的現実を認識することは当時においてもそれほど難しかったわけではないこと、本当に難しかったことは、ゼロト主義的現実を克服することが可能か、また如何にすれば可能かを見極めることであった、と指摘している。ゼロト主義者がこの点にこだわったのに対して、ヘロデ主義者は深入りしなかった、言い換えれは、ゼロト主義者が躓いた難問を、ヘロデ主義者は避けて通った、とも指摘している。

「結論」はまた、ヘロデ主義的合理性は本質的に不完全なものであり、それに対して異議申し立てがなされたのは当然であった、と記している。

このように本論文は、ヘロデ主義的合理性の盲点に着目しながら、日本、朝鮮、中国の3国の近代におけるゼロト主義の主張について再検討を加えている。従来の通説を批判しつつ、多くの新たな知見を導き出し、国際関係思想研究の分野において新たな地平を切り開いた、と高く評価できる論文である。「一般的考察」の部分で示された論理展開は極めて緻密であり、文章も明晰である。

特に、ゼロト主義の主張の論理とヘロデ主義の主張の論理とが鏡像的関係にあることを看破し、ゼロト主義の主張に関して、ヘロデ主義的対応によって国を保つのが不可能だという主張こそがその核心であることを論証している箇所は本論文の白眉であると評価しえよう。

なお、本論文の序論では、ゼロト主義とヘロデ主義は広義に解釈すれば、今なお生き続けているという見方もできる、と述べられているが、類似の状況下では類似の対立が起こりうる。例えば、通商問題や安全保障問題等において国内事情を優先する立場と対外協調を優先する立場の対立である。近年、日本では通商問題が国内的な争点になると、「開国」、「鎖国」あるいは「黒船」といった、幕末とのアナロジーを意識した言葉がよく使われる。こうした問題について検討を加えようとする際、本論文に示された考察は示唆を与えるものとなろう。

さらに、この論文は「事例研究」の部分で3国のゼロト主義の比較研究も行っている。各国のゼロト主義に関する研究がこれまで全くなかったわけではないが、従来はこうした比較研究は、2国を対象とするものなら日本対朝鮮、あるいは日本対中国といった形で進められ、3国を対象とする場合も、日本対朝鮮、中国というように日本と他の国々を比較するという形で行われるのが常であった。従って3国といっても、実際は比較されるのは2国であるに過ぎなかった。本論文は実際に3国についての比較を行い、特に各国の守旧的攘夷論者（中国の場合は守旧的主戦論者）の自強に対する姿勢に注目して、各国の相違を整理している。その結果、日本のゼロト主義者が一般に自強の追求に積極的であったのに対し、朝鮮のゼロト主義者は消極的であり、中国のゼロト主義者についてみると、開化的主戦論者は積極的だが、守旧的ゼロト主義者は消極的であることを論証している。こうした論点もこの分野の研究をより深めた、と評価しえる。

こうした考察を進めるため、著者は幕末以来の日本の史料、朝鮮の漢文文献、中国語文

献を広く渉猟している。難解な文献を読み抜き、その共通点と相違点を適切に区分して論じており、著者の読解力が並々ならぬものであることを立証している。その史料操作の方法も格段に優れている。

しかし、本論文に全く不十分な点がないとはいえない。例えば、著者は「合理性」と「非合理性」を二者択一的に捉えているが、実際には零から百までの段階がある。この二者択一的な扱いの中で、ゼロト主義の合理性とヘロデ主義の非合理性が誇張されているのではないか、という疑問に充分答えていない嫌いがある。さらに、著者は「国を保つ」とか「国が滅びる」という用語を「百か零か」の問題であるかのように扱っているが、これも様々な中間段階を持つもので、ゼロト主義路線の結果としての「亡国」と、ヘロデ主義路線の結果としての「亡国」は相当違った内容のものとなるのではないか、という問題も考察を加えるべきであった。

また、著者は確かに論理の比較に重点をおいて議論しているが、ゼロト主義とヘロデ主義を担う人間類型が対極的に異なっている点にも注意を向けるべきであった。前者は確率の少ない賭けを敢えてする、闘争的人間像であり、後者は賭けを避け、闘争を避ける人間像であるが、こうした人間像の相違に目配りして、論点を深めるべきであった。

しかし、以上のような問題点は本論文の基本的価値を損なうものではない。総じて本論文は東アジアの近代国際関係思想研究の分野で、卓越した貢献をしており、博士（学術）の学位を授与するのに充分な業績であると、認められる。